

令和元年8月30日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26380880

研究課題名(和文) 教職への意思決定における内的ワーキングモデル理論の構築 - 社会心理学視点も加えて -

研究課題名(英文) Inner working model for career decision making of teaching profession.

研究代表者

若松 養亮 (Wakamatsu, Yosuke)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：50273389

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)： 教員養成学部学生の教職への意思決定とその変動に、自己・他者・職業への信頼が関わるという理論モデルを検証した。結果として2年次までにおいては関連が見られたが、3年次以上では関連は弱かった。

面接調査からは、教職に就く意思決定の分岐点となる認知や体験によるモデルを構築した。分岐点とは、(1) 教職以外に強く惹かれる選択肢の認知、(2) 教師に必要な能力が大きく不足するとの認知、(3) 不安への耐性や努力に見合うほどに教師の仕事や成果に強く魅かれたか、である。

さらに彼らの意思決定のキーワードとして「楽しい仕事」に注目した。その含意は多様であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教員養成学部における教職志望意識の変動を説明する枠組みとして、少なくとも教育実習前の年次において、自己・他者・職業への信頼という概念にそれなりの説明力があることがわかった。

また、その枠組み以外に得られたものとして、意思決定の分岐点となる認知や体験、また「楽しめる仕事かどうか」とまとめられるキー概念に着目することができたことで、教育実習以降の年次における意思決定を解明する糸口が得られたことも意義と言える。

研究成果の概要(英文)： The research examined a theoretical model that career decision making about teaching profession career is related to sense of reliance on self, others, and the vocation. The sense of reliance was related to degree or pattern of preference of teaching profession in freshmen and sophomore, but its relation was weakened in juniors or seniors.

Interview data produced a model composed by cognition and experiences as turning points for making decision about teaching profession. The turning points were (1) recognizing a attractive alternative other than teaching profession, (2) recognizing much deficit of ability for teaching profession, and (3) recognizing much value for one's ongoing endurance or effort.

Finally it is concluded that their career choice or decision making was characterized by the key word 'pleasure job.' Its meaning was various.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学生 教育学部 教職志望 信頼 意思決定

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、教員養成学部に入學しながら教員を目指さない学生が少なからず存在し、教育学部の存在意義が問われている現状を踏まえ、また反面、労働時間の長さや負担の重さが喧伝されるなかでそれでも教員を進んで目指す学生も存在するという個人差を説明する理論的なモデルが不在であることから計画された。研究開始時点では、従来の自己効力感研究の流れも組み入れ、そうした自身に対する信頼だけでなく、対人的な職業である教職においては同僚や子どもといった他者への信頼、さらには労働環境や職場待遇の厳しさが喧伝されがちなだけに教職という職業自体に対する信頼も関わるであろうという予想から、ボウルビイの愛着の理論に端を発する「内的ワーキング・モデル」を、職業選択に援用できるのではないかと予想し、その理論的な枠組みから一定の意思決定理論が構築できると考えた。

また先行する筆者自身の調査結果から、個人ごとの興味や能力の認知といった従来指摘されてきた要因に加えて、他者との比較や他者からの影響といった社会心理学的な観点が必要ではないかという新奇な問題意識も背景として存在していた。

### 2. 研究の目的

教員養成学部生が最終的に教職を志望または非志望になるという個人差、および4年間の志望意識の変動に対して、自分自身への信頼、同僚や子どもへの信頼、また教職という職業への信頼といった「信頼」をキーワードにした理論モデルを構築すること。およびそこに他者からの影響、他者との比較といった社会心理学的な変数がどのように関連しているかを検証すること。さらには、質的研究である面接調査を並行して行うことで、上記の2つの研究目的以外にも、学生の意思決定をより良く説明する概念や分岐点となる体験・認知があれば、それを明らかにすることも、目的とした。

### 3. 研究の方法

2014年度の国立大学教員養成学部入学生を4年間にわたって縦断的に質問紙調査を行った。質問紙は、教員志望の程度と、上記の信頼という枠組みで作成された尺度、同級生や先輩といった他者からの影響をみる設問で構成された。調査は1～3年次は必修授業の終了時に一斉実施、4年次は各専攻の卒業論文発表会の際に行った。実施時期と対象者数は、2014年11月に214名（1年次）、2015年11月に202名（2年次）、2016年11月に200名（3年次）、2018年2月に221名（4年次）であった。4時点を通して調査に協力した人数は117名（うち女性は60名）であった。

また、質問紙調査の学年よりも1つ先行する学年に対しては面接調査を行い、翌年度の質問紙調査で検証する仮説について、質的な観点から検討を行った。面接調査では、まず入学時から調査時点までの教職志望意識の推移と教職以外の進路を希望する強さをそれぞれ曲線グラフで書いてもらい、それをもとにそのような推移や志望の強さの理由、教職に就くことについて不安に思っていること、あるいは感じている魅力、そう思うようになった体験や契機を質問した。実施時期と対象者数は、2014年12月4日から2015年1月13日にかけて2年次生14名、2016年2月8日から3月3日にかけて3年次生15名、2017年2月3日から3月15日にかけて4年次生15名、および2019年2月12日から3月13日から4年次生15名であった。

### 4. 研究成果

4年間の志望意識の変動をクラスタ分析によって類型化すると「一貫高志望」、「中途に低下」、「一貫非志望」、「すぐに非志望」、「転向志望」、「志望度弱化」の6群が抽出され、教員養成学部でよく見られるパターンが抽出できた。この6群で信頼の尺度得点を比較すると、1年次の得点では「子どもがかわいい」という情緒的な側面を中心に、また2年次の得点では「手応えの予期」という自己効力感的な側面を中心にかなりの群間差が検出された。しかし教育実習がある3年次の得点では群間差があまり見られなくなり、4年次には「教職への不信」得点が非志望者において低いが、あとはさして大きな差異は見られなかった。以上のことから、「信頼」がキーワードになる側面は、教育実習前の、どちらかという観念的に教職を考えている段階では教職の志望・非志望と関連を示すが、教育実習を経て現実的・具体的に検討を行う段階では、十分な説明力をもたないことが伺われる。

社会心理学的な変数との関連は、1年次と2年次の調査において検討した。1年次の調査においては、周囲の友人や先輩と教育や教員、子どもについて話している人が多いほど、教職志望度が高いという結果であった。ただこの結果は、周囲の他者との関係が先にある場合よりも、本人の教職志望が先にあり、その結果として周囲の人と教職について話すという方向での因果関係の方がよりあり得るため、他者からの影響とは断じにくい。ただし双方向的な関係は考えられるであろう。また他の学生との相互作用を尋ねた設問からは、教職を志望している学生はそうでない学生に比べて、現職の教員や周囲との交流から熱意を高揚させる体験が多く、熱意が不足していると感じる体験は少ないという結果が明瞭に見られた。また他者と比較して子どもとのやりとりや教え方の技量について優越感をもつ体験も多いようであった。また2年次の調査においては、他者との相互作用は大きく2因子にまとめられたが、熱意を高揚させる経験の多さにおいては教職志望意識と正の関連が見られたものの、能力的に劣等感をもつ経験においては関連がなかった。この2つの因子は熱意と能力、肯定的な評価と否定的な評価というよ

うに2つの相違が交絡しているため、教育実習前である2年次の特殊性も含めて、今後とも検討していく。

面接調査の成果としては、学生が教職志望に至る過程で分岐点となる認知や体験をモデル化する試みを行った。まず、教職以外に強く惹かれる選択肢が存在する場合には、非志望の確率が大きくなる。続いて、教職に就く、または適応していくうえで大きな能力差を感じると認知されると、やはり非志望の確率は大きくなる。さらには観察や体験をする中で、感じた魅力や手応え、また現場の先生の大きな成果を感じ、それを励みや憧れ・目標として、自分が教職に対してもっている不安や懸念に耐えられる、あるいは努力で克服していけると感じられれば、教職に決める可能性が高くなる。このようなモデルは、別途検証中である。

またもうひとつの成果として、教職にせよ、それ以外の職業にせよ、学生が進路意思決定をするうえで、その仕事が「楽しい」かどうか、「楽しめる」かどうかという言い回しがよく登場することに着目した。この「楽しさ」は、必ずしも趣味的・享乐的な意味とは限らず、ときにはどんなことが待ち構えているかわからないといった状況にも「楽しめる」と使われるなど、多様な含意がある。これについては、2019年4月からの新たな科学研究費補助金を獲得したので、そちらで解明していく計画である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計0件)

若松養亮 (2017). 教員養成学部4年次生における教職の選択・棄却の意思決定 滋賀大学教育学部紀要, 67, 219-229.

※他に現在、執筆中(「発達心理学研究」に2019年10月に投稿予定)

[学会発表] (計9件)

1. Wakamatsu, Y. (2015). Career Decision-making for Teaching Profession and Internal Working Model. IAEVG 2015 International Conference p.129.
2. Wakamatsu, Y. (2016). Career Decision-making for Teaching Profession and Interpersonally Motivated Experience. ICP 2016 International Conference.
3. 若松養亮 (2016). 大学2年次生の教職志望意識と関連体験 — 1年次の志望意識からの変化も視野に — 日本教育心理学会第58回総会発表論文集 p. 189.
4. 若松養亮 (2016). 教員養成学部の教職志望意識形成 — 教育実習経験前と経験後の意思決定の特質 — 日本キャリア教育学会第38回研究大会 研究発表論文集 pp.62-63.
5. 若松養亮 (2017). 内的ワーキング・モデルからみた教職への意思決定 日本発達心理学学会第28回大会 研究発表論文集 p.373.
6. 若松養亮 (2017). 教育学部生の教職志望意識と自己・他者・職業への信頼 日本教育心理学会第59回総会発表論文集 p.154.
7. 若松養亮 (2017). 教員養成学部4年次生の意思決定とその揺らぎへの対処 — 教職に決めるか否かに着目して — 日本キャリア教育学会 第39回研究大会 研究発表論文集 pp.174-175.
8. 若松養亮 (2018). 教員養成学部生における教職の過酷さ認知が志望意識に及ぼす影響 — 教育参加体験の印象と志望度の関連に対する調整機能 — 日本教育心理学会第60回総会発表論文集 p. 676.
9. 若松養亮 (2018). 教育学部生の教職選択と成長欲求の関連 日本心理学会第82回大会発表論文集 p.173.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。